

# 日本近代文学会 関西支部 会報 第十二号

関西支部事務局 08・8・30

## ★支部大会研究発表題目

### ◎二〇〇七年秋季大会

「11月10日 於・天理大学」

・『虞美人草』における視線―(勸善懲惡)の裂け目―  
坂井二三絵(大阪大学大学院)

・木下李太郎『唐草表紙』における個人主義と民族回帰  
権藤愛順(甲南大学大学院)

・三島由紀夫 短編小説研究―「大臣」「訃音」からの一考察―  
井迫洋一郎(大阪府立河南高等学校)

・川端康成『父母への手紙』の構造  
渡邊ルリ(東大阪大学)

### ◎二〇〇八年春季大会

「6月14日 於・花園大学」

(シンポジウム)  
近代文学のなかの「関西弁」  
――語る関西/語られる関西――

・司会 熊谷昭宏・島村健司

・織田作之助の関西弁  
宮川 康(大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎)

・「関西弁」からみる大岡昇平の文学  
花崎育代(立命館大学)

・三島由紀夫「絹と明察」論  
木谷真紀子(同志社大学)

・阪神モダニズム再考  
井上章一(国際日本文化研究センター)

## ★支部大会印象記

### 二〇〇七年度秋季大会印象記

二〇〇七年度の秋季大会は十一月十日に天理大学で開催された。当日は爽やかな秋空のもと、図書館周辺の木々の紅葉も鮮やかであり、土曜日ということもあってか静謐な雰囲気のカンパスの中で久し振りに「文学研究の世界」に浸ることができた。ここで私は前半の二つの発表についての感想を記すこととする。

坂井二三絵氏の「『虞美人草』における視線―(勸善懲惡)の裂け目―」は、まず『虞美人草』を甲野(哲学者)・小野(詩人)・宗近(行動する人)という三つの相異なるタイプの人物を造型し、その意識や理想の対立や共振を描き出すようにしている作品と捉える。その一方で、あまりにも固定的に役割化された登場人物の視線や勸善懲惡といった

価値観が、やがて作品の随所で破綻を余儀なくされることから『虞美人草』を、ある価値観のフィルターを通してみることの限界を意図せずして描き出した作品であると位置付ける。論者が自身の問題意識に沿って作品を丁寧に読み解いてゆく姿勢には好感を抱いたが、なかでも藤尾・小夜子・糸子各々の女性が男性の視線や価値観をこえて変容するなかで、やがて伸びやかなイメージを獲得してゆく過程の分析には興味を惹かれた。今後は漱石の他の作品や同時代作家の作品との比較検討をあわせて進めることで『虞美人草』の独自性がより一層明らかになるものと期待するものである。

ついでに発表、権藤愛順氏の「木下李太郎『唐草表紙』における個人主義と民族回帰」は、主に明治末年の青年を描いた「荒布橋」、「六月の夜」を取り上げ、旧道徳などの圧迫から逃れる手段として選んだ個人主義的な生き方が、青年たちに新たな苦悩を与えるものとして機能しているとし、青年たちがいかにして個人主義から民族への回帰という経過を辿ったかを論じたものである。遺伝や聴覚に対する李太郎自身の強い関心を手がかりにヴントの民族心理学から影響を受けつつ、やがて民族精神へと回帰する過程の分析を試みている。同時代資料を含む多くの文献を駆使して論証する手際は鮮やかであるとさえ言えよう。もともと、問題の設定が大きいだけにこちらの勉強不足もあるのだろうが、いくつかが疑問も抱いた。例えば「荒布橋」、「六月の夜」には確かに「労働者階級への憧憬」が窺えるが、同時にそれらの描写が「手

荒で変に不調和なもの(漱石序文)であることも否めないのではないか。李太郎の時代認識の変遷については、例えば足尾銅山事件、大逆事件を背景として時代に翻弄され苦悩する青年の姿を描いた「和泉屋染物店」などといった作品とあわせて論じることでもう少し問題点が明瞭になると思えた。いずれにせよ鶴外、漱石の序文が同時に掲載されるといふ僥倖に恵まれた同著については、今後もっと論じられるべきものであるとの感想を抱いた次第である。(村田好哉)

三番目の発表は井迫洋一郎氏「三島由紀夫 短編小説研究―『大臣』『訃音』からの一考察―」。府立高で午前中に模擬授業を行ってから駆けつけたそう、鷹揚な口調には好感をもった。氏は戦後「純粹さと透明さ」を指向していた三島が、のち諧謔味のある知的なコントを「模範」とみなしたという短篇への方法意識の変化に言及した上で、三島自身の大蔵省官僚時代の体験を下敷とした昭和二十四年の短篇「大臣」「訃音」を組上に乗せた。そうして元樞太庁長官の祖父・定太郎の権力志向と失脚、また農商務省に勤めたニヒルな性格の父・梓の言動に触れ、皮肉なコント形式の短篇「大臣」の国木田と父が仮託され、そこに彼らの人間像に対する揶揄が描かれたと論じた。祖父と父の説明以降、二作の解説の時間が不足したのは惜しまれるが、官僚の自恃と卑屈を描出した両作により平岡家代々の官吏の道との訣別をし、作

家・三島への転身が果たされたとする見解には首肯しうるものがあつた。質疑ではこの二作を選んだ必然性なり魅力、社会問題への関心のありかを問う意見や、原資料に直接あたつていないとの指摘もあつた。作者への還元は三島文学研究の常石だが、さらに斬新かつ多角的な視点からの考察を期待したい。

四番目の発表は渡邊ルリ氏「川端康成『父母への手紙』の構造」。「父母への手紙」は亡父母宛の特殊な書簡体小説で、これまでの低い評価と違い主題と構造をもつ作として読み直そうとの意欲的な論が展開された。ただB4用紙五枚の裏表に刷られたレジュメを眼で追い説明を辿るには少々骨が折れた。氏は初出が分載されていた「父母への手紙」で川端が異なつた読者を意識して順次執筆したことに着目し、文意の真の理解者として想定される「小説」の様々な読者層と「私」の記憶にない内面の父母との重層性同作の特質を見出していった。さらに書簡体小説のジャンル分け、西洋の作を例とした書き手の姿勢の比較をなし「父母の手紙」の諸信の語りに着目しては「私」の意識のありの小説は「私」が不在の父母への屈折した思いを現実の人間関係から認識して行き、それまでの手紙の「嘘」の語りを超えてしまうまでの瞬間が描かれていたのだとした。全体に時間不足の憾みは残つたが、「抒情歌」など同傾向の小説群への位置付け、受信者不在と「嘘」の意義、また読者層の重層性をめぐる質疑は充実し、やや錯綜気味であつた論点の所在が瞭然と整理されてゆく感があつた。なお最後の総評において、太田登支

部長が「作品、作家の急所を衝かず、外周を調べる発表が近年多い、急所にきりこむ志をもつた発表を望みたい」といった旨の概括をしておられた。自省をうながされる寸鉄言で、太田氏の温顔がこの折はきりりと引き締まり、学問への厳しい覚悟と情熱が参会者に自ずと伝わつてくるようであつた。

(外村彰)

## 二〇〇八年度春季大会印象記

昨年春季大会の「鉄道」と同様、中央に対する地方（標準語に対する一方言）ではないもう一つの（中心）としての関西が顕在化する。関西弁のありかたが、小説世界にどのように反映されているかを考察することが、今回の大会テーマである。

まず、宮川康氏「織田作之助の関西弁」では、織田は大阪アクセントで書き言葉を綴つていたので、という仮説を立てるべく、『夫婦善哉』冒頭を、地の文を標準語・関西弁でそれぞれ朗読して聞き比べ、後者がより自然であることを確かめるところから始まつた。そして、「コーテ」（買った）などのウ音便、標準語で読むことが不可能な「…なんだ」「よう：ん」といった表現が時代を下るにつれて出現してくる段階を追い、各作品における関西弁の位置づけの変容を跡づけた。黙読の時、読者の頭に書き言葉はどう響いているか、という問題意識が生じること自体、「関西弁」は語彙よりもむしろイントネーションによつてこそ成立していることの証左のように思われる。発表者の言葉通り「実証の困難」などところを可能な限り語彙の方から攻めていった、

ということになるうか。

花崎育代氏「関西弁」からみる大岡昇平の文学」は、作品中の「あなた」「あなた」の使い分けが発話者の心情や相手への距離のとりかたの変化、物語展開と連動していることを中心に、会話文中での関西弁の用い方をいくつかの作品を通して考察するものであつた。ネイティブである織田は関西弁を読み手に理解させるべく苦心したが、東京出身にして関西在住経験者である大岡は関西弁の用い方にとりまですべて自覚的であつたかはわからないとされる。その点、『酸素』における「あなた」と「あなた」との間の懸隔は、確かに最も明示的なものだろう。むしろ、話し言葉はなべて関係性の産物であり、場や相手の（の対応）次第で変化するのは、方言の用い方に限ることではない。

この点、関西在住の東京人による文化的排他性の描出部分は「関西弁」を透視化しない作品の特性を浮き上がらせており、論旨を補強する重要な指摘であつた。共に、方言論の文献にもあたるなど視野が大きくとられ、かつ作品に即した厳密な論証にはそれぞれ説得力があつたが、時間不足で説明がやむなく端折られたことは惜しまれる。

語り言葉と書き言葉の間を往還する、小説の言葉固有のありかたと、「関西」という場の独自性。一見次元を異にする二つの問題の絡み合いの整理が必要ではないかと、二つの発表を聞いて感じた。関西人は標準語の文章を示されても、それを「関西弁」で音読する。古文や英語に対してさえ、それは可能である。イントネーションに強く支えられたこの一種の全能性は、標準語とは別の（中心）を形成し、小説の書き言葉を語り言葉に還元する力を持つ

ている。これが地の文と台詞とを融合させ、あるいは、標準語としても用いられる「あなた」も「あなた」も共に「関西弁」の中に取り込むことを可能にする一因となつていのではないかと思われた。

(木村小夜)

休憩を挟み、後半は木谷真紀子氏「三島由紀夫『絹と明察』論」、および井上章一氏「阪神モダニズム再考」の二つの報告があつた。前半の関西弁の言語としての側面にこだわつた内容に対し、後半はおおむね関西のもつ地域性を検討したものであつたように思われる。

木谷氏の発表は、関西弁話者ではない三島が、「絹と明察」において関西弁をどのように作品化したのかを問うたもの。たとえば旧来指摘されていたもの以上に直接な典拠が存在することや、作品の主要舞台であつた彦根の実地調査など、作品の背景を丹念に掘り起こす氏の立論には、配布された厚なレジュメと共に圧倒されることが多く、少なくとも筆者にとつては得るものが多い発表だつたように思えた。ただ惜しむらくは、今回の特集テーマであつた関西弁と作品との関係性がやや希薄であつたことであろう。質疑応答の際にも期待の声があつたが、たとえば駒沢の使用する「関西弁」と紡績工場の労働者の使用する「駒沢紡績語」との対立など、作品内のさまざまな（声）（ないしは発表者の言う「音」）が生み出す位相とその摩擦について、氏のさらなる考察を聞いてみたか感じ

た。 続く井上氏は、一九三〇年代の阪神間における文化の担い手が、概して関

西弁を捨てようとしていたこと、それらによって築かれた文化を「阪神モダニズム」と称することへの違和感を述べるものがその論旨であったように思う。音楽家・貴志康一から垣間見える東京／関西の文化環境の差異や、阪神間ブルジョワの配偶者問題と関西弁の使用をめぐる考察など、硬軟取り混ぜた実例を持って語られる内容に、会場全体は引き込まれるように聞き入っていた。ただ氏の「阪神モダニズム」の考察対象が建築・音楽などにあり、会場および他パネリストの主たる関心領域である「文学」とはやや位相を異にしていたためだろうか、ディスカッションでは両者、会場ともしばらく議論のすりあわせに苦慮していたかのようを感じた。最後にきてようやく関西弁に付随するジェンダー性や、関西弁イントネーションを書くうえで生じる問題、そして近代文学は関西弁を取り入れることで何を得たのか——など、「文学」と「関西弁」を接続する問題提起がなされたが、時間の都合上議論にまで発展できなかったことが惜しまれた。

会員のほとんどが関西弁話者ということもあり、時に会場全体が関西弁アクトンを確認しあうことで連帯感を持つような場面も見受けられた。ただしそれは半面、身体化されたものをわが身から引き離して検討することの難しさを実感させる機会になっていたように思え、井上氏と会員との温度差も、われわれの文学中心主義的な思考を再認識させる機会として意味があったのかも知れない。いずれにせよ関西支部会員にとって得ることの多い特集であった。

(木田隆文)

## ★研究会紹介

主に関西で行われている研究会について、以下の項目順で紹介します(順不同)。

- ①会の名称
- ②代表者または事務局等、連絡先の氏名・住所・電話番号等
- ③希望者のための入会案内
- ④その他注意事項

### ①芥川龍之介研究会

吉岡由紀彦方

③本会は、一九九八年、出身・所属大学の枠を超えて、芥川龍之介とその文学について研究すべく、関西在住の院生・研究生・大学教員を中心に発足されました。現在の例会参加者数は、十、十五名ほどです。芥川以外の近代作家や、さらに外国文学・比較文学を専門とする方も参加して下さっています。年二回(年末に大学の冬休みと夏休み)、土曜日に大阪市内で「例会」＝「研究発表会」を開催しています。「例会」は大阪で開いていますが、関西以外にも参加されています。そのため、発足当初から数年間は「例会」を春夏秋冬の年四回開き、三年ほど前から回数を年二回に減らし春と秋に開催していました。地方の大学教員の方も参加しやすいように、「年二回開催」はそのまま「冬休み(十二月か一月)と夏休み(七月下旬か

ら九月上旬)」の開催に変更しました。また、参加者の専門や研究対象の多様化をふまえ、発足主旨の「芥川龍之介とその文学について」も、五年ほど前から「芥川龍之介とその文学を中心とした日本の近現代文学について」と、あまり「芥川にこだわらない」方向に変更しました。なお、現在の「会費」「会場費」「通信費」の類は頂いておりません。ただ、遠方からご参加いただく場合、交通費は各自でご負担下さるようお願いいたします。最後になりましたが、当会では「入会(参加)資格」などは設けておりません。「愛好会」ではなく「研究会」である事をご理解いただければ、どなたでもご参加いただけます。例会参加希望の方は、事務局宛に e-mail か FAX、往復葉書等で連絡下さい。追って「例会案内」を送らせていただきます。

④これまでの「発表題目・発表者・会場等」については、当会のホームページ、「国文学」「学界教育界の動向」、「文学・語学」「集報」、「いずみ通信」に催し、研究会、同人誌などの「案内」欄を参照下さい。ホームページの URL は、[http://www.geocities.jp/bookend\\_ryunosuke5569/](http://www.geocities.jp/bookend_ryunosuke5569/)です。メールアドレス・FAX 番号をお教え頂ければ e-mail か FAX で年二回の「例会案内」を送らせて頂きます。なお、当会では、経費を抑えるため葉書など郵送による例会案内は送っておりません。

② 阪神近代文学会事務局

〒658-0001 神戸市東灘区森北町6-2-23 甲南女子文学部信時哲郎研究室内

③ 私たち阪神近代文学会は、大学院生を育てるために阪神間の大学の交流を積極的に行い、先生方も模範を示して良い発表をしていくという事で始まった会です。夏冬2回の大会を開催するほか、年に1回、機関誌(「阪神近代文学研究」)を発行しています。大学の所在地に関係なく、門戸を広く開放していますので、大会へのご参加、学会への入会を心よりお待ちしております。④ これまでの発表題目、機関誌目次、諸規定等の詳細は左記URLをご覧ください。<http://www.soc.ni.ac.jp/hanshu/>

- ① 松山坊っちゃん会
- ② 会長 頼本富夫 〒790-0833 松山市祝谷3-8-16 TEL&FAX 089-924-2698
- ③ 夏目漱石の顕彰及びひとと作品を研究し、漱石を語る伝統ある親しみのある会。誰でも入会可。
- ① 『論潮』S会
- ② 事務局・永吉寿子 〒561-0802 豊中市曾根東町5-10-25-40
- ③ 入会希望の方は、[tonchousuryey@yahoo.co.jp](mailto:tonchousuryey@yahoo.co.jp) までご連絡下さい。
- ④ その他・同人誌『論潮』(創刊号)を、本年6月に刊行します。

★会員の業績

(凡例)

著書名：『』  
論文名：「」  
掲載紙誌名：『』  
注記等：( )

※関西支部会員の業績のうち、〇七年四月から〇八年三月までに発表されたものを収録した。

※各業績に付した番号のうち、①は単行本、②は雑誌・単行本等収録論文、③はその他(研究ノート・書評・口頭発表・項目執筆等)を示す。なお、①は書名・出版社・発行年月の順、②は論文タイトル・掲載誌・発行年月の順、③はタイトル・掲載書(発表会名)・発行年月(日)の順で記した。

※掲載紙誌の巻号数は省略し、雑誌・単行本は発行年月のみ、新聞・会報等は発行年月日を記した。  
※原則として、その他業績の種類、執筆項目等の詳細、編者名・発行所名等は会員の届出に記載のあったもののみを記した。

※著者名・論文名・掲載紙誌名の用字は、会員届出の記載に拠った。

ア行の部

青木亮人

②「尾崎紅葉の『洗鯉』句」『俳文学研究』〇七年一〇月  
②「明治旧派の蕪村言及記事」『大坂俳文学研究会会報』〇七年一〇月

②「『四五』句考―子規達の蕪村調―」『俳文学研究』〇八年三月  
②「俳諧を知らざる新聞記者―同時代評の正岡子規像―」『同志社国文学』〇八年三月  
③「月並宗匠の短冊、軸」『俳句研究』〇七年六月  
③分担執筆『戦後詩誌総覧』(二巻) 日外アソシエーツ 〇七年十二月  
③項目執筆『現代詩大事典』三省堂 〇八年二月

③「其角堂永機の短冊」『其角三百年忌 平成石なとり』夢工房 〇八年二月  
③「大正十年『書生』生活 学校・教育」『衍書月刊』〇八年三月  
③「俳諧いまむかし(五)く(一六)」『氷室』〇七年四月く〇八年三月(連載中)

③講演「『写生』の成立とその限界」醒醐会(於京大会館) 〇八年三月三日  
③「赤瀬雅子  
①『フランス随想―比較文化的エッセー』秀英書房 〇七年一〇月  
③「ムーランの夏」『多羅』〇七年四月  
③「ラテン区の冬の庭園」『多羅』〇七年八月  
③「パリのパッサージュ」『多羅』〇七年十二月  
③口頭発表「ジョルジュ・シムノン  
のバリー岡本綺堂の江戸との対比に  
おいて」日本仏文学会例会(神宮  
前区民会館) 〇七年四月二八日

乾口達司  
③項目執筆「秋田雨雀」「秋山清」「浅尾忠男」「伊藤和」「菊岡久利」

「小森盛」「自然と印象」杉本春生「日本未来派」『現代詩大事典』三省堂 〇八年二月

岩見幸恵

③項目執筆(8項目)『司馬遼太郎事典』勉誠出版 〇七年十二月  
③項目執筆(6項目)『藤沢周平事典』勉誠出版 〇七年十二月  
③「立論のためのリスト―他界リスト―リンクリスト・空白とアイデンティティの借用を中心に」『別冊・国文学 解釈と鑑賞 特集村上春樹』〇八年一月  
③項目執筆(6項目)『現代詩大事典』三省堂 〇八年二月

太田登  
①「伝えよう! 晶子の国際性」国際シンポジウム報告書 大阪府立大学 〇八年三月  
③講演「歌集『一握の砂』の魅力について―石川啄木は石川―をどう演出したか」〇七年九月三日  
③シンポジウム「いま、『明星』を考える」毎日新聞社毎日ホール 〇七年十一月二三日

奥村紀子(菅紀子)

③口頭発表「漱石のライバル重見周吉―その後の発見資料を中心として―」松山坊っちゃん会第164回例会(松山東高校) 〇七年十月(松山坊っちゃん会会報) 〇八年四月一日に論文として掲載

カ行の部

川端俊英

②「部落問題解決過程における芸芸研究の歩み」『部落問題研究』〇七年四月  
②「『破戒』成立の背景と今日的意義」『部落問題研究』〇七年六月  
③「『破戒』起稿時の習作にみる人物像」『人権と部落問題』〇八年一月

木村小夜  
②「小川未明「赤い蠟燭と人魚」とその周辺」『福井県立大学論集』〇七年七月  
②「寓話の中の変容―戦後短篇管見―」『福井県立大学論集』〇八年三月

③「旅と文学・福井・田山花袋」『若狭道』『国文学 解釈と鑑賞』〇七年四月  
③「紹介・山口俊雄編『太宰治をおもしろく読む方法』」『日本近代文学』〇七年五月  
③「作品に描かれた女性像・『火の鳥』―(人の役に立ちたい) 女優―」『国文学 解釈と鑑賞』〇七年十一月

③口頭発表「『駆込み訴へ』読解の可能性」近代文学研究会 〇七年十二月

工藤哲夫  
③項目執筆「カイロ団長―注文の多い料理店」『宮沢賢治大事典』渡部芳紀編 勉誠出版 〇七年八月

熊谷昭宏  
②「紀行文の書き換えと文体の楽しみ―明治四〇年前後の遅塚麗水の紀行文を中心に―」『同志社国文学』〇八年三月

- ③「『現代詩手帖』第11巻第1号」第11巻第12号『戦後詩誌総覧①』和田博文・杉浦静編 ○七年十二月
- ③項目執筆「青木はるみ」「岩本修蔵」「大和田建樹」「城術」「滝口武士」「平戸廉吉」「横顔」「未来派」「位置」「ペンギン」『現代詩大事典』大塚常樹他編 ○八年二月

倉西聡

- ②「横溝正史の「本格探偵小説」(その一)——J・D・カーとF・W・クロフツの影響から」『武庫川国文』○七年十一月
- ②「横溝正史・処女作品集『広告人形』の戦略——宇野浩二の影響から」『国文学研究』○八年三月
- ②「横溝正史の「本格探偵小説」(その二)——J・D・カーとF・W・クロフツの影響から」『日本語日本文学論叢』○八年三月

小林幹也

- ②「読者をあざむく文体——久生十蘭『湖畔』論」『近畿大学日本語・日本文学』○八年三月
- ③「移動と発見」(黒住嘉輝著『高安国世秀歌鑑賞』書評)『青磁社通信』○七年五月
- ③「静けさを描く」(有沢螢第二歌集『朱を奪ふ』書評)『玲瓏』○七年九月
- ③「馬をどう詠むか」『歌壇』○八年一月
- ③「書き換えられた未来」(塚本邦雄ワンテーマ「西行」)『玲瓏』○八年一月

サ行の部

佐伯順子

- ②「現代日本の女性作家が描く家族と母性——山田詠美・吉本ばなな・江國香織が描く「近代家族」の終焉と新しい「親密性」」『タイ国日本研究国際シンポジウム2007』論文報告集『チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座』○八年三月
- ②「Beyond the Gender Dichotomy: The Cross-dressing Tradition in Japanese Theatre」『Intersections: Gender, History and Culture in Asian Context』Murdoch University, March, 2008

「明治美人帖」NHK出版(『嫉妬の劇場』と合冊)○八年二月

- ③「樋口一葉『たけくらべ』」『名作はこうのように始まるII』中村邦生・千石英世編著 ミネルヴァ書房 ○八年三月
- ③「能楽の社会的価値」『新・能楽ジャーナル』たちばな出版 ○七年十一月
- ③「本の虫日記」『論座』朝日新聞社 ○七年十一月
- ③「唐人お吉の虚実」新国立劇場『黒船』公演パンフレット ○八年二月
- ③「ベスト・朗読24今月の推薦盤・泉鏡花「高野聖」」『The CD Club』ソニー・ミュージック・ダイレクト ○八年三月

清水康次

- ②「『アテナ文庫』の研究(その2)。各点調査I」『京都光華女子大学研究紀要』○七年十二月

真銅正宏

- ①「小説の方法——ポストモダン文学講義——」萌書房 ○七年四月
- ①「食通小説の記号学」双文社出版 ○七年十一月
- ②「荷風初期の翻訳または翻案——ゾライズム移入の実態——」『国文論叢』○七年七月
- ②「実業家の興味——日本人旅行者の見たイタリア(1)——」『人文学』○七年十一月
- ②「官僚と政治家の視察——日本人旅行者の見たイタリア(2)——」『人文学』○八年三月
- ③「山口誓子」『展望 現代の詩歌第9巻 俳句I』飛高隆夫・野山嘉正編 明治書院 ○七年四月
- ③「作家の横顔を忘れよう」(「フオーラム京」)『京都新聞』○七年七月二三日
- ③「書評・南明日香著『永井荷風のニューヨーク・パリ・東京——造景の言葉——』」『日本文学』○七年十二月
- ③項目執筆「上田敏雄」「石上露子」「大田黒元雄」「リアン」「衣裳の太陽」『現代詩大事典』三省堂 ○八年二月
- ③「棟方志功の板画と谷崎」『谷崎潤一郎と画家たち』作品を彩る挿絵と装丁』芦屋市谷崎潤一郎記念館 ○八年三月

須田千里

- ②「『今昔物語集』の内と外——『羅生門』「偷盗」をめぐって」『国文学 解釈と鑑賞』○七年九月
- ③「新刊紹介 登尾豊著『幸田露伴論考』」『国文学 解釈と鑑賞』○七年九月

関肇

- ①「新聞小説の時代——メディア・読者・メロドラマ——」新曜社 ○七年十二月
- ②「村上浪六と『太平新聞』」『学習院大学国語国文学会誌』○八年三月

夕行の部

東口昌史

- ②「高橋和巳『邪宗門』論——〈神の不在〉をどう乗り越えるか——」『文月』大阪教育大学近代文学研究会 ○七年七月
- ②「わが自同律の不快——埴谷雄高『死霊』私論——」『文華』啓明学院 ○八年二月
- ②「(女)の不可解さにむかって——武田泰淳「才子佳人」論——」『日本文学』日本文芸学会 ○八年三月
- ②「自同律のゆらぎ——中島敦「北方行」論——」『兵庫国漢』兵庫県高等学校教育研究会国語部会 ○八年三月

外村彰

- ②「岡本かの子『浴身』にみる自責と自己愛——石川啄木を合わせ鏡として——」『国際啄木学会研究年報』○七年三月(昨年度遺漏分)
- ②「岡本かの子『館』考——「時」を超える母の館——」『滋賀大國文』○七年七月
- ②「岡本かの子『わが最終歌集』と『深見草』の位置——歌風の変遷と貫流するもの——」『立命館文学』○八年三月
- ②「岡本かの子『老妓抄』——發明と

家出の意味するもの」『日本文芸学』〇八年三月

③「井上多喜三郎宛 立原道造書簡について」『立原道造記念館』〇七年六月

③「伊藤人誉著『馬込の家 室生犀星断章』(亀鳴屋刊)評」『室生犀星研究』〇七年十月

③「高祖保作品年表(一)」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』〇八年二月

③「井上多喜三郎」『詩と自然』「田山花袋」「平田秃木」「明珍昇」「村井武生」「室生犀星」『現代詩大事典』安藤元雄・大岡信・中村稔監修三省堂 〇八年二月

③「鯨 命の火花 岡本かの子」『伸び仕度』名作に描かれた少年少女―上田博監修・古澤夕起子・辻本千鶴編 おうふう 〇八年三月

③「口頭発表『歌人・岡本かの子考―昭和期の歌集に至る表現の変遷と、そこに貫流するもの―』立命館大学日本文学会 〇七年六月

③「口頭発表『岡本かの子』『老妓抄』―発明と家出の含意するもの―」日本文芸学会(於立命館大学) 〇七年九月

### 友田義行

②博士論文「文学と映画の弁証法―安部公房／勅使河原宏論―立命館大学 〇八年三月

③翻訳「歌い合う機械たち―安部公房とサイエンス・フィクション」(クリストファー・ポルトン著、内藤由直氏との共訳)『文学』〇七年七月

③解説「『米軍再編』と沖繩」(藤本幸久・本橋哲也・萩原一哉との共著)『立命館言語文化研究』〇八年

二月

③「口頭発表『安部公房と勅使河原宏の衝突―『他人の顔』(愛の片側)の原爆表象をめぐって』日本文学協会第二十七回研究発表大会 〇七年七月

③「視線の主体性獲得まで―安部公房／勅使河原宏『燃えつきた地図』論」国際研究理論システム研究会第4回シンポジウム 視覚性と日本文学―研究・方法・基礎理論をめぐって 〇八年一月

### 内藤由直

②博士論文「国民文学のストラテジー―プロレタリア文学運動批判の理路と隘路―」立命館大学 〇八年三月

③翻訳「歌い合う機械たち―安部公房とサイエンス・フィクション」(クリストファー・ポルトン著、友田義行氏との共訳)『文学』〇七年七月

③「口頭発表『林房雄「青年」論―本文改訂の問題―』日本近代文学会秋季大会 〇七年十月

③「イヴェント・レビュー」イタリア観の一世紀―旅と知と美―  
Immagini d'Italia in Giappone un secolo di testimonianza』『日本近代文学』〇七年十一月

### 永井敦子

②「『変態』言説と探偵小説―谷崎潤一郎「青塚氏の話」論」『日本近代文学』〇七年十一月

### 中川成美

③「口頭発表『須賀敦子の霧と光』シンポジウム、イタリア観の一世紀(於立命館大学) 〇七年六月

③「格差社会の深層に潜むもの」『京都新聞 朝刊』〇七年九月二四日

③「口頭発表『集と断片―国際共同研究の新たな視界―』日仏国際研究シンポジウム(於国文学研究資料館) 〇七年九月

③「口頭発表『文学・明治20年前後―立命館大学図書館開設百周年記念シンポジウム(於立命館大学) 〇七年十一月

③「グローバルゼーションのなかの孤独な巨人、乱歩」第2回国際乱歩カンファレンス(於立命館大学) 〇七年十二月

③「解説 文学的想像力としての裸の眼―多和田葉子著『旅をする裸の眼』講談社 〇八年一月

③「コメントおよび語り」(高橋光子との共著)『立命館言語文化研究』〇八年二月

③「在欧左翼知識人の軌跡」『立命館言語文化研究』〇八年二月

③「哲学者 戸坂潤」『京都新聞 朝刊』〇八年二月十七日

### 永瀨朋枝

②「藤村『処女地』に執筆した女性作家達(一)―生田花世、池田小菊、川島つゆ、澤ゆき」『神女大國文』〇八年三月

③「尾西康充著『北村透谷研究―内部生命』と近代日本キリスト教』『日本近代文学』〇七年五月

③「詩人―北村透谷」『佐々木指月』「柳田国男」「錦米次郎」「馬場孤蝶」『現代詩大事典』三省堂 〇八年二月

③「口頭発表『北村透谷「鬼心非鬼心」へのアプローチ』近代文学研究会(於光華女子大学) 〇八年三月

中村美子  
①『「明暗」論集 清子のいる風景』和泉書院 〇七年八月

①「夏目漱石絶筆『明暗』における「技巧」をめぐって』和泉書院 〇七年十一月

②「『菜穂子』における夫婦の邂逅―「それから」の解釈について―」『解釈』〇七年八月

③「【漱石詩訳注】(無題) 死死生 生万境開 大正五年十月十一日」『会報 漱石文学研究』〇七年八月二十日

永吉寿子  
②「太宰治『春の枯葉』と占領下の『学校』表象」『昭和文学研究』〇八年三月

生井知子  
②「志賀直哉年譜考(二)―明治十六年から明治二十六年まで―」『同志社女子大学日本語日本文学』〇七年六月

③「志賀直哉全集逸文紹介」『同志社女子大学日本語日本文学』〇七年六月

### 野田直恵

②「芥川龍之介「奉教人の死」の可能性―流布本文が糊塗したもの―(一)」『日本言語文化研究』〇七年十二月

信時哲郎  
③紹介「野田宇太郎『淡路』」『国

文学 解釈と鑑賞』〇七年四月

③項目執筆「シグナルとシグナレス」  
「心象スケッチ」 「種山ヶ原」 「畑のへり」 『宮沢賢治大事典』 勉誠出版 〇七年八月

③書評 「少女マンガ ジェンダー表象論(男装の少女)の造形とアイデンティティ」 『昭和文学研究』 〇七年九月

③項目執筆「尾崎喜八」 「佐藤春夫」 「辻潤」 「富田碎花」 「服部嘉香」 「民衆詩派」 他 『現代詩大事典』 三省堂 〇八年二月

③評釈 「宮澤賢治」 文語詩稿 五十篇 評釈(10) 「甲南女子大学研究紀要 文学・文化編44」 〇八年三月

### ハ行の部

#### 花崎育代

② 「大岡昇平による富永太郎——大正十二年・「俯瞰景」を中心にして——」 『論究日本文学』 〇七年十二月

② 「大岡昇平における横光利一・覚え書——「寝園」「機械」「母」を手がかりに——」 『横光利一研究』 〇八年三月

③ 「書評 大原祐治著『文学的記憶・一九四〇年前後——昭和期文学と戦争の記憶』」 『日本文学』 〇七年六月

③ 「坂口安吾研究会 第一四回研究会 集会 基調講演(佐藤卓己 「『終戦記念日の神話』を超えて」) 印象記」 『坂口安吾研究会』 研究会のこれまでの活動』 〇七年六月  
(<http://page.freett.com/angoken>)

(insyou.html)

③ (日比嘉高氏との共著) 「コメントおよび質疑応答」 (特集 国民国家と多文化社会(第16シリーズ) 帝国の孤児たち——20世紀の日本語作家 アジア—上海の養女たち) 『立命館言語文化研究』 〇八年二月

#### 細江光

② 「「ガラスの仮面」小論——美内すずえ氏の価値観について」 『ピラシジ』 〇七年四月  
② 「謎の「画家」・中川修造氏のために」 『谷崎潤一郎顕彰記念誌』 〇八年三月

### マ行の部

#### 水川布美子

② 「日本近代詩における詩集『死刑宣告』の意義」 『神女大國文』 〇八年三月

#### 峯村至津子

② 「〈烈女幻想〉の揺らぎ—樋口一葉「やみ夜」再考—」 『国語国文』 〇七年五月  
② 「〈世〉への違和と〈世〉の侵入と—一葉日記と小説の間—」 『透谷研究』 〇七年六月  
② 「明治文学に於ける住吉社のゆかり—住吉踊をめぐって—」 『住吉社と文学』 和泉書院 〇八年一月

#### 宮菌美佳

① 「『明暗』と天野屋」 「『生き方のスタイル・型』提示メディアとしての小説—明暗をめぐって—」 『『明暗』論集 清子のいる風景』 鳥井正晴監修・近代部会編 和泉書院 〇七年八月

晴監修・近代部会編 和泉書院 〇七年八月

② 「小学校国語科におけるPISA型読解力の育成 発問・授業の工夫」 『研究紀要』 常磐会学園大学 〇八年三月

#### 村田裕和

② 「仏蘭西学会の設立と伝統主義論争—エミール・エックと太宰施門の第一次世界大戦—」 『比較文学』 〇八年三月  
③ 口頭発表 「萩原恭次郎と黒色・アヴァンギャルド—戦前期アナキズム文学試論—」 日本近代文学会2007年度秋季大会 〇七年十月  
③ 口頭発表 「消失する跡(トレース)の陰画—江戸川乱歩「陰獣」の視覚性—」 国際研究理論システム研究会第4回シンポジウム 視覚性と日本文学—研究・方法・基礎理論をめぐって 〇八年一月

### ワ行の部

#### 和田芳英

① 「『二〇〇七年昇曙夢歿後50年を偲ぶシンポジウム』 『昇曙夢の生涯と業績を語る』 記念誌」 和泉書院 〇八年一月  
③ 「昇曙夢歿後50年を偲ぶシンポジウム 『昇曙夢の生涯と業績を語る』」 (於奄美市名瀬) 〇七年五月十九日

### 事務局から

〇維持会費の納入が大変少ない状況です。ご協力のほど、何卒よろしくお願ひします。

〇本年度春季大会のブックレット『近代文学のなかの「関西弁」—語る関西—語られる関西』が和泉書院から今秋刊行されます。ご期待下さい。

### ☆関西支部公式ブログ

<http://kansai-kindai.at.webry.info/>